

中国の大学における日本語教育の現状

—中国南東部の一国立大学を事例に—

袁 莉萍

要旨

本稿は、中国の高等教育機関を一事例として、非専攻第一外国語としての日本語教育における現状と問題を考察し、大学生の日本語学習にどう影響を及ぼすかについて検討することを目的とする。中国南東部の一国立大学の非専攻第一外国語（日本語）学習者と中国人教員に対するインタビューとアンケート調査を実施した。その結果、中国における日本語教育の現状に関しいくつかの問題点が明らかになった。第一に、日本人との交流の機会が少ないこととネイティブの日本語教師がいないことである。日本の人々の本当の姿が見ることができないから日本文化や言語への深い理解はできず、日本に対して誤解のある中国大学生も少なくない。第二に、中国の大学における日本語学習者の急増により、教員、教育施設、書籍などが不足し、情報の共有もできない。第三に、研究教育環境は十分に整っていないのが現状である。このような問題をどう解決すれば良いか、日中の教育者にとって残された課題である。

はじめに

周知のように、1972年の日中国交正常化から今日まで、日中間の交流の進展や日本企業の中国進出の拡大により、中国における日本語学習者が増加し続けている。中国の大学には日本語学科が次々と設置され、日本語を専門として勉強する本科生および第二外国語として勉強する学生の人数が急速に増加してきた。

中国の日本語教育は、教育形式からみると、大学における日本語教育と、中学校・高校における日本語教育と社会人を対象に行う日本語教室の三つに大別できる。また、中国では高等専門教育機関としての4年制の大学を除き、3年制または2年制の高等専門学校、高等職業学校、これと同資格の夜間大学、社会人教育大学などがある。これらの高等教育機関は国家教育部または地方教育局の承認を得た公立教育機構である。国家教育部または地方教育局の承認がなければ、学生の学歴が認められないことになっている¹⁾。

中国の大学の日本語教育をさらに大きく分けると、外国語専門教育としての日本語専攻、一般外国語教養、第2外国語としての日本語教育に分けられる。

本稿では、第1章で中国の日本語学習ブームの形成について考察し、第2章で中国の高等教育機関における一つの事例を紹介したい。非専攻第一外国語としての日本語教育における現状と問題について調査するため、筆者は2007年12月8日～15日と2013年12月15日～18日に中国南東部のA大学の非専攻第一外国語（日本語）学習者と中国国籍の日本語教員に対するインタビュー及びアンケート調査を実施した。いずれもアンケートの主要な質問項目ごとに回答者比率を示し、その内容を分析したい。そして「おわりに」では、以上の調査結果をまとめて、今後の課題について検討する。

1 中国の日本語学習ブームの形成について

1.1 中国における日本語教育の略史（1972年～2013年）

1972年の日中国交正常化により第1次日本語ブームが生じ、多くの大学で日本語教育が開始された。1973年から各大学で日本語の教科書や辞書の編さんが始まり、ラジオの日本語講座の放送も始まった。1979年には現在の東北師範大学で日本留学生（学部）のための予備教育が開始された。また、1980年に当時の大平首相の提唱を受ける形で日中両国間政府の合意に基づき「在中国日本語研修センター」（通称「太平学校」）が設立され、1980年から1985年までの5年間で計600名の大学日本語教師の再教育がそこで実施された。

1980年代になると、まず中等教育、次に高等教育での日本語教育のシラバスの整備が始められた。また、テレビ日本語講座の放送も始められ、1980年代半ばには第2次日本語ブームが訪れた。さらに1985年より上記「太平学校」が発展的に解消する形で「北京日本学研究中心」が設立され、日本語教師の再教育と大学院修士課程の学生の教育を平行して実施するようになった。

1990年代には、各教育段階でのシラバス整備の結果を受けて、それに準拠した教材が次々に出版された。日本語は、英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。

2000年代に入り初等・中等教育機関で学習者数が減少しているものの、高等教育機関や学校教育以外の機関では学習者数の大幅な伸びが見られた。特に高等教育機関では職業大学（短期大学）における日本語学部が増加し、また、第二外国語として日本語を履修する学生も増えている。2009年海外日本語教育機関調査における日本語学習者数は前回の2006年調査結果より大幅に増え、約83万人となった。

国際交流基金は2013年7月8日、「海外での日本語学習者数速報値」を公表した。

〈表1〉学習者数上位10か国・地域の変化

2009年 順位		2012年 順位	国・地域名	2009年 学習者数（人）	2012年 学習者数（人）	増減率（%）
2	▲	1	中国	827,171	1,046,490	26.5
3	▲	2	インドネシア	716,353	872,406	21.8
1	▼	3	韓国	964,014	840,187	▲12.8
4	▶	4	オーストラリア	275,710	296,672	7.6
5	▶	5	台湾	247,641	232,967	▲5.9
6	▶	6	米国	141,244	155,939	10.4
7	▶	7	タイ	78,802	129,616	64.5
8	▶	8	ベトナム	44,272	46,762	5.6
11	▲	9	マレーシア	22,856	33,077	44.7
12	▲	10	フィリピン	22,362	32,418	45.0

（国際交流基金提供）

国際交流基金によれば、日本語学習者の総数は、136カ国・地域で約398万人に達し、2009年の調査結果に比べ9.1%増えた。学習者数が一番多かったのは中国で、約105万人。3年前の約83万人に比べ26.5%の増加である。国・地域別で09年に第1位だった韓国を抜いて、トップになった。韓国は12.8%減少した。

中国における日本語教育の特徴は、学習者の全体数が多いこと、中・上級段階に達する学習者が非常に多いことである。日本語能力試験の基準で言えば、中等教育あるいは大学の第二外国語教育でN4、第一外国語教育でN2、専門教育では在学中にN1レベルに達する。

1993年に一般公開で実施されるようになった日本語能力試験の受験者は年々増加しており、2009年度の受験者数は32.7万人を超え、受験会場も37都市70会場にまで拡大した。

1.2 中国における外国語教育および日本語の地位

①外国語教育における日本語の人気

初等、中等、高等教育に関わらず、英語を除けば日本語学習者数は他の外国語より多い。近年、中等教育では第一外国語としての日本語学習者は減少傾向にある。しかし、高等教育における日本語教育の機関数及び学習者数は依然増え続けている。

②大学入試での日本語の扱い

大学の一般入試では日本語も英語と同様、外国語科目の入学試験として扱われている。

③修士学位研究生入試の日本語能力試験の扱い

大学院（修士課程）入学希望者を対象に、入学公共科目全国統一試験として扱われている。

〈表2〉初・中等教育における日本語教育の地位

初等教育	小学校3年より、第一外国語（必修）として英語、日本語（一部の地域のみ）。
中等教育	第一外国語（必修）：英語、日本語とロシア語（一部の地域のみ）。 第二外国語（選択）：日本語の他に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、韓国語などがある。

1.3 日本語学習ブームの背景

日中両国の経済交流とくに日本企業の対中投資の拡大は、中国における日本語学習者が続けて増加する重要な要素の一つである。

日本企業の中国進出の第1次ブームは1985年から1987年ぐらいであり、日本の円高が進行し、中国では経済特区や外資優遇策が整備され、安価な労働力を求めて食品や繊維の軽工業部門の企業が進出していった。地域的には市長が積極的に働きかけたこともあって大連などに多数の企業が進出した。第2次ブームは1991年ぐらいから95年頃までで、進出件数で急激な伸びをみせた時期である。この時期は電気や機械メーカーが生産拠点を中国に求めるものだった。地域的には香港の後背部でもある華南地域がインフラも整っており、多くの企業が進出した。とくに家電メーカーの進出が際立っていた。

その後1997年のアジアの金融危機の頃にいったん減少したが、2001年の中国のWTOの加盟を契機に中国において様々な規制が緩和され、中国の市場が一段と開放される中で、第3次の対中投資ブームが起こってきた。日本企業は、生産拠点だけでなく販売拠点の確保

を目指すようになり、文字通り中国を「世界の工場」に加えて「世界の市場」としてのポジションも視野に入れた方向へと転換しつつ、地域的には上海を中心とする長江デルタ地域に多数の企業が進出している。

日本企業の進出によって、日本語ができる人材への需要が増える一方である。中国国家教育委員会の調査によると、日本企業の進出が目覚ましい上海では、日本語学科の求人倍率が10数倍を超えている²⁾。このような状況はさらに人々の日本語学習の意欲を高めている。

そして、中国に進出している日本企業は、社員を対象に積極的に日本語教育を行っている。ガーデンホテル上海の場合、中国人従業員はあわせて1,050名である。毎週、日本語は6クラス、英語は2クラスを用意して、従業員に外国語を勉強するチャンスを与えている。そして、年に4回試験を実施し、試験の成績によって「基本的な会話ができる社員」「一般的な会話ができる社員」「かなり専門的な会話ができる社員」という等級をつけ、名札にその等級を示す星をつけさせている。日本語は赤い星、英語は青い星、「基本的な会話ができる社員」には星を1つ、「一般的な会話ができる社員」には星を2つ、「かなり専門的な会話ができる社員」には星を3つ与える。この等級には手当がついていて、青い星1つだと60人民元、2つだと90人民元の手当が貰える。習得が難しい日本語は2割増しの計算で、赤い星1つだと72人民元、2つだと108人民元の手当が貰える仕組みである³⁾。日系企業の多い大連では、「日本語を話し、理解する人が多い。そしてこれは戦前教育を受けた人たちばかりでなく、若い人たちも同様である」「街の日本語学校はいずれも盛況をきわめている。市役所などでも10人に1人は日本語を完全に理解」するようになっている⁴⁾。

また、日本国際交流基金の2009年度と2013年度の調査によると、中国に各種の一般成人向けの日本語クラスによる日本語学習者の数は相当数にのぼる。大学が運営する出国者向けの日本語クラスも盛況である。また、仕事上での必要度に関わらず、昇進や各種資格取得試験のために日本語を学習する者も多い。さらに最近では、大学に進学できなかった高校卒業生向けに、日本国内の提携先の日本語学校を経由して日本の大学等への進学を謳って学生募集を行う民間の日本語学校が増えている。日系企業や日本・日本人との取引が多い地元企業の中には、従業員向けに企業内日本語教育を行っているところもある。さらには、教科書、DVD等による独習用教材も書店に多く並び、そうした教材によって自学自習している層も相当数存在するものと思われるが、具体的な数は不明である。

現在、たくさんの日本人が中国を訪れる一方、大勢の中国人が日本を訪れており、中国で働く日本人、日本で働く中国人が増加しているので、今後、日本語または中国語を使用する場面が一層増えると共に、日本語教育または中国語教育は一層普及化していくことは間違いない。

また、信用調査会社大手の「帝国データバンク」は、中国に進出している日本企業は約1万4,400社に上るとの調査を取りまとめており(2012年9月26日)、そのための人材確保に向けて、今後は、日本語または中国語のコミュニケーション能力の高い人材が求められるのは必至である。

こういう背景のもとで、日本語人材の需要量が増える一方であり、日本語学習者が激増し、「日本語ブーム」が中国の大学における日本語教育の活性化をもたらしたことは言うまでもない。

2. インタビューとアンケート調査

2.1 A大学の概況

A大学(国立)は1965年に設立され、中国の中央教育部(日本の文部科学省にあたる)の統一管理下にある総合大学で、教学および教育監理は中国の国家中央教育部の統一規定に従ったものである。9月に入学し、翌年1月中旬までが前期(第1学期)、冬休みと2月(旧暦のため、1月末は春節もある)の春節休暇をはさみ、3月から7月までが後期(第2学期)である。全国各地からの在校生は16,100人、専任教員は1,000名以上。

A大学外国語学院は英語系(教育学コース、師範類コース)、第2外国語系(日本語学科、ドイツ語学科、韓国語学科)の2系から成る。英語系には3名外国人教師と韓国語学科、ドイツ語学科各1名外国語教師が配置されている。大学独自のルートで採用する場合と中国政府の外国専門家局を通しての招聘とがある。日本語は必修科目、韓国語とドイツ語は選択科目。在学学生数は693名、専任教員は62名。

2.2 調査対象

日本語学科教員と3年生(英語教育学コース4クラス、英語師範コース2クラス)全員、合計207人にインタビューとアンケート調査を実施した。

2.2.1 日本語学科3名教員にインタビュー

1回目は、2007年12月8日～15日までの間でインタビュー調査を実施した。

日本語学科教員4名のうち、1名は男性、学士学位。3名は女性、学士学位1名、修士学位2名、中に日本への留学経験者1名。助手1名(大卒・英語専攻・常勤)。

本学院における日本語教育の問題点について、日本語学科の4名教員にインタビューした、主な内容を下記のようにまとめた。

- ①ネイティブの日本語教師が必要。
- ②原版日本語の参考書・専門書が少ない。
- ③授業時間数は不十分である。
- ④国内外大学とのネットワーク作りが必要。
- ⑤他の学院の学生は日本語授業を受けたいが、日本語教師不足でカリキュラムに入れてない。

①について、筆者は在職中の2年間(2007年8月～2009年7月)で、日本語教育資格を持っているネイティブの日本語教員を募集したが、見当たらないのは現状である。

②の問題を解決するため、日本にいる友人にお願いし、原版日本語の書籍30冊を郵送して貰った。日本語学習者人数平均すると、7人は一冊である(30冊、在学学習人数207、A大学外国語学院の大学生のみの計算)。少し解消したが、まだまだ足りない。

③について、A大学外国語学院の日本語教育は、外国語学院英語専攻の学生のみ実施している。学習期間は、3年次第1学期～4年次の第1学期までの1年6ヶ月である(中国の大学は、9月に入学し、翌年1月までが第1学期、3月から7月までが第2学期である)。学生たちは進学、就職、留学などのため、日本語能力試験などの関連資格を取得しなければならない。修士課程進学したい場合は、N2(日本語能力試験2級)の資格が必要である。

しかも、日本語能力試験を受けるチャンスは年に2回しかない（以前は毎年12月の第1日曜日のみで、2009年度から7月と12月の2回で実施されるようになった）。半分以上の学生にとって日本語学習はゼロからスタートであり、1年間でN2に合格するのはほとんど不可能である。大学卒業し、大学院修士課程に進学したい場合、N2を合格しなければならない。そのため、2008年度から日本語学科のカリキュラムを修正し、日本語学習期間は2年次の第2学期～4年次の第1学期の2年間として設定されている。

A大学外国語学院は全学の英語、日本語、ドイツ語、韓国語の教育を統括管理している。日本語の教師は不足しており、他の学院（日本の学部にあたる）の大学生は日本語を勉強したくてもできない。当初、他の学院の学生は教室の後の空いている席で授業を受けていたが、だんだん教室の通路までも埋められてしまい授業の支障になった。仕方なく、他の学院の大学生に聴講禁止令が学校から出された。同じ大学の他の学院の大学生は土曜日の大学内または街の日本語教室に日本語を勉強する形になったが、どの日本語教室も超満員だった。詳しく調査統計をしてないが、1,000人超えと推測される。実に、A大学在学中の学生はテレビやラジオの日本語講座を通して独学で日本語を勉強している学生は半分以上にもいると聞いていた（A大学の在校生人数は16,100人）。

整備されていない日本語学習環境にありながら、学生たちの一所懸命に勉強する姿は教師たちの励みになっている。

私のA大学に在任中、私を含む日本語学科の教師たちは、日本人と接する機会がほとんどない学生たちに対し、日本語カラオケ大会や日本文化祭などを開催し、教室内外で日本語や日本文化と接触の機会を増やす環境作りを工夫したものである。

2度目の調査は、2013年12月15日～18日にかけてオンラインより実施した。

調査内容をまとめ：カリキュラムと学習人数は大きな変化がない。ただ、学生の保護者からは「日中関係が悪くなっているので、日本語を勉強しても、就職有利にならないだろうという考え方も多くあり、必修科目から外して欲しい」との声があった。社会的ニーズに応じて、日本語科目は選択科目になるかもしれないとの回答だった。

2.2.2 2007年12月8日～15日の授業時間に3年生203名学生にアンケート調査を実施した。無回答や一部しか回答しなかったものを除き、192人分（男性63人、女性129人）回答が得られた。

(1) 日本語の学習期間は？

答え	① 6ヶ月未満	② 1年未満	③ 1年6ヶ月	④ 2年未満
人数	125	67	0	0
%	65.1%	34.9%	0	0

今回アンケートの調査対象の中に、日本語の学習歴は6ヶ月未満の人は125人、65.1%で、1年未満の人は67人、34.9%である。学習歴が異なる原因は、英語教育学コースの学生と英語師範類コースの学生は、A大学外国語学院に入学時期別々であること。

中国の殆どの大学は4年制の本科と3年制または2年制の専科を備えている。前者は大学

卒の資格と学士資格、後者は学士資格が与えられず、大学卒の資格のみが授与される。専科の学費は本科の6割くらいである。大学全国统一試験で、本科大学へ進学できない高校卒業生は、次の進学先は専科大学である。

調査対象の125名の学生は、A大学外国語学院英語教育学コース4年制の本科大学生。その他67名の学生は、A大学外国語学院英語師範類コースの学生で、学位を取得のため、他の専科大学2年間または3年間勉強し、卒業後A大学に進学した者。もとの専科大学で、1年間未満日本語を勉強した。

(2) 日本人が好きですか。嫌いですか。

答え	①好き	②嫌い
人数	94	33
%	49%	17.2%

今回アンケートの調査対象の中に、94人、49%の人は日本人が好きで、33人、17.2%の人は日本人が嫌い。残りの65人、33.8%の人は、日本に行ったことがない、日本人と接触したこともない、日本のことがよく分からないから、日本・日本人に対して好き嫌いとも言えないので、無回答であった。

(3) 日本人が好きな理由は？(2番の質問の答え①を選択した方は記入して下さい)

好きな理由	人数
礼儀正しい	22
時間厳守	20
親切で優しい	13
日本人が自主的にルールを守ること	13
日本のマンガ・ゲーム・アニメが好き	10
品質のいい商品	9
伝統を重視	3
日本文化が好き	2
頭が良くて、勤勉で働く者	2

日本人が好きな理由の中には、日本人の礼儀正しい・時間厳守と思う人が一番多くて、合わせて42人いる。その学生たちの親・親戚・友人が日系企業および日中合弁企業に勤めている、または日本に旅行した経験がある。

次は日本人親切で優しいと自主的にルールを守るとは映画やテレビドラマから知ったと答えた学生が合わせて26人いる。それは1980年代から中国で「伊豆の踊子」「絶唱」「男はつらいよ」「一休さん」などを放送された結果だと思われる。

3番目は、インターネットで日本のマンガ・アニメ・掲示板で日本のことを知り、日本のことが好きになったと答えた学生は10人いる。

4番目は日本製品の質が良いと答えた学生は9人いる。1980年代から日本のテレビや冷蔵庫などをはじめ、現在の自動車などの商品を中国へたくさん輸入してきた、日本製品は品質いいと中国の人々に広く知るようになった。

それ以外は、「日本文化が好き」と「日本人は頭が良く、勤勉で働く者」と答えた学生はそれぞれ2人いる。この4名の学生は他の学生と比べて、日本語学習歴は長い、日本人と交流したことがある。

(4) 日本人が嫌いな理由は？（2番の質問の答え②を選択した方は記入して下さい）

嫌いな理由	人数
日中戦争の歴史問題	17
いじめ	3
過労死	3
けち	2
理由なし	8

日本が嫌いな理由の中に、日中戦争の歴史問題の影響を受けた人が一番多い。「理由なし」と書いた人は8人いることを深く考える必要がある。

下記は学生たちが書いたものである。

A学生は、「日本を嫌いな原因は日中戦争の歴史問題以外に何者でもない。確かに歴史を忘れてはいけないと思いますが、長い時間が経っていてそこまで重要にも思えない。それから国の歴史は政治に関することで、私たちにはあまり関係がないから」。

B学生は、「私も日本が嫌い。しかし嫌いなのは日本政府と右翼だけだよ。国民は右翼とは違うから」。

C学生は、「日本を嫌いな部分があり、好きなのところもある。正直に本当に複雑です」。

2013年7月23日、華字紙・日本新華僑報によると、米調査機関ピュー・リサーチ・センターは同年3月と4月に、アジアの国々に世論調査を行った。

ピュー・リサーチ・センターが調査を行った際、78%の中国人が、日本政府は第二次世界大戦中に行った侵略に対して十分な謝罪をしていないと考えており、これが「嫌日」感情の根源である。歴史上発生した侵略戦争は中国に深刻な被害をもたらした。日本政府はたびたび反省と謝罪の意を表しているが、日本の政治家たちの歴史を否定する言動に、中国人は日本政府の「誠意」を疑っている。

(5) 日本語がやさしい・難しい、その理由は？

答え	日本語やさしい	日本語難しい
人数	132	60
%	69.7%	31.3%

今回アンケートの調査対象の中に、132人、69.7%の人は英語と比べると日本語は難しくないと感じている。一方、日本語の動詞の変化が多くて、敬語、謙譲語等難しいと感じた学生は60人、31.3%である。

(6) 日本語が明るい・暗い、その理由は？

答え	日本語明るい	日本語暗い
人数	141	14
%	73.4%	7.3%

今回アンケートの調査対象の中に、学生は日本語学習のビデオや DVD 中の日本人はいつもニコニコして、声もきれいと明るく感じたのは 141 人、73.4%である。また、反面、オリンピックで聞いた「日本の国歌」は重すぎで暗いと感じている学生は 14 人、7.3%である。その他の 37 人、19.3%の学生は評価基準がわからないから、無回答であった。

(7) 卒業したら、就職、国内で進学または海外留学したいですか？

答え	就職したい	国内で進学したい	海外留学したい
人数	119	21	52
%	62%	10.9%	27.1%

今回アンケートの調査対象の中に、卒業後就職したい学生は 119 人、62%である。主な理由はお金がない。近年、中国は確かに、経済の発展で一部の国民が豊かになってきた。しかし、貧富の差が拡大、特に沿岸地域と農村との間に国民の所得の差が大きくなっているため、物価の高い海外に子どもを留学させるということは多くの父母にとっては現実的なことではない。国内で進学したい学生は 21 人、10.9%で、理由と就職したい学生は同じである。まずは就職して、お金が貯まって、それから海外へ留学しに行くと考えている学生が中国では大勢いる。語学勉強の学生にとって、海外留学は憧れや夢の一つである。

(8) もしお金があって、チャンスもあれば、日本に留学に行きたいですか？

答え	①日本に留学に行きたい	②日本に留学に行きたくない
人数	150	42
%	78.1%	21.9%

今回アンケートの調査対象の中に、日本に留学に行きたい人は 150 人、78.1%で、行きたくない人は 42 人、21.9%である。

(9) 日本に留学に行きたい理由は？（8 番の質問の答え①を選択した方は記入して下さい）

日本に留学に行きたい理由	人数
日本語力の向上	118
日本の文化や習慣などを体験したい	13
経済、企業管理、科学技術を学びたい	12
旅行に行きたい	6
友達が日本にいる	1

今回のアンケートの調査対象は全員大学生だから、「日本語力の向上」を書いた学生が一番多い。つぎに、「日本の文化や習慣などを体験したい」と「経済、科学技術を学びたい」と書いた学生が合わせて 25 名がいる。学生たちは、今まで日本に対する情報はすべて映画、テレビ、インターネット、新聞雑誌などからだけで、自分の目で日本をみたい、自分の身で日本の生活や習慣などを体験したい、そして日本の経済、企業管理、科学技術を学びたい大学生が多い。

大勢の人は日本に留学したい、日本に旅行に行きたい、それを考えられるもう 1 つの理由は地理的に近いということと、中国でも日本でも漢字が使われていることであろう。

(10) 日本に留学に行きたくない理由は？（8番の質問の答え②を選択した方は記入して下さい）

日本に留学に行きたくない理由	人数
専攻分野ではない	16
イギリスやアメリカなど、英語を話す国にいきたい	13
日中両国の政治的関係が良くない	10
海外いきたくない	2
中国文化と似ている	1

今回のアンケートの調査対象は全員英語専攻の学生たち、日本語は非専攻第1外国語必修科目として勉強している、「専攻分野ではない」と書いた学生が一番多く、先にイギリスやアメリカなどの英語を話す国に留学に行きたいとの願望が強い。

次に、日本に留学に行きたくない理由は「日中両国の政治的関係が良くない」と答えた学生が10名いる。それは、最近冷え込んでいる日中両国の政治的関係も中国人学生の日本留学に影を投げかけていると考えられる。

(11) 本学における日本語教育に関する問題点は何だと思いますか？

- ①日本人との交流機会が少ない。
- ②原版日本語の書籍（参考書・専門書）が少ない、特に「現代日本関係図書」が少ない。
- ③日本語の教師が不足、特にネイティブの日本語教師がいない。
- ④日本語会話を練習する相手がいない。
- ⑤先生の日本語のレベルが低い、教え方が悪い。
- ⑥その他

答え	①	②	③	④	⑤	⑥
人数	87	46	43	16	0	0
%	45.3%	24%	22.4%	8.3%	0	0

今回アンケート調査の中で、大学における日本語教育に関する問題点は「日本人との交流機会が少ない」と選んだ学生は87人、45.3%と最も多い。それは学生の日本の社会及び文化自体に対する幅広い関心がある、日本人と交流したいとのことを期待するものでもあろう。

次は、「原版日本語の書籍」や特に「現代日本関係図書」が少ないと「日本語の先生が不足、特にネイティブの日本語教師がいない」と選択した学生は、それぞれ46名（24%）、43名（22.4%）であった。日中交流の拡大や日本企業の中国進出によって、日本語ができる人材に対する需要が高くなり、人々の日本語学習意欲に大きな刺激を与えている。日本語学習者数は急激に増えて、中国北京や上海などの大都市以外の地方都市大学は日本語教師、日本語学習資料が不足しているのは現状である。

また、「先生の日本語のレベルが低い、教え方が悪い」との質問に対して、無回答であった。その理由は、中国には日本より学生が教師を尊敬する習慣のようなものが伝統的に育まれている。9月10日には「教師の日」が設けられるのもその一つである。学生は意見を明確に述べ、よく教師の教えに従う。

(12) 日本語の学習動機は何ですか？

- ①日本語能力試験など関連資格の取得
- ②良い職につけるから
- ③学校の指定する必修科目だから
- ④日本へ留学したいから
- ⑤進学のため
- ⑥趣味として
- ⑦社会の潮流に乗る
- ⑧その他

答え	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
人数	59	42	38	34	15	2	2	0
%	30.7%	21.9%	19.8%	17.7%	7.8%	1%	1%	0

今回アンケート調査対象の中に、「日本語能力試験など関連資格の取得」を選択した学生が一番多い。それは中国の国情と深く繋がりであり、周知のように中国では1977年に大学受験制度が回復されてから、日本語は外国語受験科目のひとつとされてきた。それに、近年中国の経済の急成長や外資企業の進出につれて、英語や日本語など外国語のできる人材の需要がいっそう高まってきた。民間企業や政府機関などでは、コンピューター応用力や外国語能力の有無が職員の評価や昇進の重要な条件の一つとされている。また、今中国の若者の間で理想な職種とされている公務員や大学教員、研究者及び外資系企業の会社員などの職に就くには、外国語ができることが条件付けられている。したがって、日本語ができることは、人材競争の激しい中国社会で立身出世の重要な武器のひとつと言える。

次は、「良い職につけるから」「学校の指定する必修科目だから」「日本へ留学したいから」「進学のため」を選択した学生人数はそれぞれ、42名(21.9%)、38名(19.8%)、34名(17.7%)、15名(7.8%)である。また、「趣味として」「社会の潮流に乗る」を選択した学生は、同じように2名(1%)である。

結果のように、大学生の日本語の学習動機は様々である。

(13) 質問があれば、書いてください。

- ①家庭主婦とは？
- ②日本人過労死で本当ですか？
- ③日本人は毎日毎食寿司を食べているのですか？
- ④日本人は生の魚しか食べないのですか？
- ⑤現代日本の人気歌を学びたい。
- ⑥原版日本のマンガ、アニメが見たい

たくさんの質問があったが、最も多かった質問は上記のようにまとめた。質問からわかるように、中国の大学生は日本社会及び日本文化にとっても興味を持っている、特に「家庭主婦」について、多くの学生はよく分からないみたい。女子学生が多いため、「家庭主婦」が一番に挙げられた。

①番の「家庭主婦」のイメージは、男子大学生と女子大学生は違う、男子学生の頭の中に家庭主婦のイメージは、毎日家に遊んだり、近所の人とよもやま話をしたり、疲れたら寝る。だから日本の『男がづらいよ』との映画がある（中国テレビで数回放送したことがある）。

女子大学生は、日本の「家庭主婦」でいいなと憧れ、仕事しなくてもよい、幸せに暮らしているとのイメージだったらしい。日本と違って、中国の職業の中に「家庭主婦」がない。中国では、夫婦共働きは普通で、男性も女性も家にいると能力がない人間、怠けものと社会から見られている。中国人は日本の「家庭主婦」に対して理解を間違ったのは、日本社会および文化がわからないからである。漢字そのまま推測している。

②番の「日本人過労死」について、大学生は、日本人は真面目で、働き過ぎ、日本社会の労働環境は厳しいと受け止めたようである。

③④番のイメージは、日本映画からの影響によるものである。中国のテレビや映画館が放送された日本映画は古いものが多かったので、映画の中に日本人食事の画面はいつもお寿司や刺身をたべている、学生たちは日本の食文化が誤解したようだ。ちなみに、筆者は初めて日本の空港についた時、映画の中と違って、和服姿の女性は一人もいないので、これは日本なのかとすごく不思議だった。

⑤⑥番について、学生たちはインターネットを通して、日本の歌・マンガ・アニメの影響によって、日本の若者文化が好きになったみたい。どのクラスも、日本語の授業だから日本の現在の流行や若者の読む本の傾向、ファッション、音楽、アニメなどが知りたかったという意見もあり、日本語教師として、もっと日本文化に引きつけた授業展開をするべきだったのではないかと考えさせられた。

日本に行ったことがない、日本人と接触したこともない大学生たちは、日本社会、日本人及び日本文化に対するイメージはずれる場合がある。日本語学習者と日本人の交流はとても重要であると思われる。

終わりに

中国の大学における日本語教育に関する現状と問題点を考察してみたが、一番大きな問題と言えば、日本人と交流の機会が少ない、教員不足、特にネイティブの日本語教師がいないことである。新しい教員を募集しているが経験不足のため、満足のできる教育に期待ができない。特に新しい学科の場合、その学科の研究と教育従事できる教員が足りない。また、意思疎通の問題や文化的な違いから、日本に対して誤解のある中国の学生も少なくない。このギャップをどのように埋めるかは、日中の教育者にとって残されたひとつ課題である。

二番目は、中国の大学における日本語教育資源不均衡と情報共有不可能地方の大学と大都市の大学、「大専」と四年制大学と新設の学科とかなり長い歴史を持つ学科との間に、教員水準、資料の多少など、かなりばらつきがあり、情報の共有もできない。都市部においては修士修了以上の学歴が必要とされている。また、日本で修士や博士の学位を取得して帰国した教師が定着しはじめている。しかし日本語教育を専門に学んだ日本語教師は少なく、教師研修が大きな課題となっている。このような問題を解決するために、日本語教師の研修は北京や上海などの大都市に集中せずに、各省の首府にある大学、地方都市や奥地に新しく設け

られている大学での若手日本語教師を対象とした日本語教育研究講座を実施することを提案する。

三番目は、日本語教師の研究活動も不十分である。数多くの教師は学内の日本語専攻と非専攻の講義、そして社会人対象のアルバイト講義に迫われて、研究活動を行う時間が少ない。確かに外国と研究交流が増えつつあるがチャンスが少ないのも事実である。

急速に日本語学習者が増大した結果、現状では日本語教育の条件及び学習環境が整っているとは言いがたい。

学生は日本の文化、社会、現代事情などについて勉強したいという要望がある。勉強する教材は教科書だけに頼らず、ビデオなどのメディアを利用して授業を行うべきである。

現代の日本語学習者である大学生は、日本語の学習によって、対日感情にプラスの影響を受けるという傾向が見られる。また彼らは日本社会や日本文化に対して、とても関心を持っていることが明らかになった。日本語学習者の増加は、人々の対日理解促進の架け橋になると考えられる。

注

- 1) 「総合的日本語教育を求めて」の「中国の大学における日本語専門教育」国書刊行会 2004年3月
- 2) 中国国家教育委員会の1993年の調査により
- 3) 中国ビジネス大競争時代『中央公論』平成7年10月号臨時増刊、P.286
- 4) 前丸紅駐中国総代表 中藤隆之『中国はいま』ダイヤモンド社、1992年、P.97~98

参考文献

- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状日本語教育機関調査・2009年』凡人社
 国際交流基金、日本国際教育支援協会（2011）『日本語能力試験結果の概要』凡人社
 文部科学 教育通信 No.318 2013年6月24日号『シリーズ・海外の日本語教育事情（14）』P.20-21
 『中国人の対日イメージと中日関係』国際協力論集 第3巻第2号 劉 志明
 『中国における「日本語の国際化」—中国日本語観調査より』国際協力論集 第4巻第1号 劉 志明 P.139
 『中国における日本語教育』2009年9月経済学論集（民際学特集）Vol.49 No. 1 山崎 淳子
 日本国際交流基金会「中国の日本語教育の実施状況」
<http://www.jpfi.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/china.html>